

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

リョウブ リョウブ科

- ・学名 *Clethra barbinervis*
- ・園内の山林に自生、花期は7～8月



塔本シスコ展*を見学して美術館を出た正面に白い花が咲いているのが目につきました。リョウブです。美術館正面の個体の花はほぼ終わりましたが、文化公園の自然林の中で次々と開花しているのが分かります。 *2022年7月9日～9月4日

リョウブは日本では北海道南部から九州にかけて広く分布する落葉広葉樹で、夏に総状にまとまった花を付けます。花序の根元から先端に向けて順次咲き上がり、花の咲く様子からハタツモリ(旗積り)と呼ばれることもあるようです。リョウブの花からは香り高い蜂蜜が取れます。夏場の花の少ない時期に咲いてくれるリョウブは、地域の植物を受粉させて植物集団を毎年維持する役割を担うミツバチやマルハナバチの集団を夏場に維持してくれる貴重な存在です。



リョウブは山間部の尾根沿いのやや乾いた場所で見かけることが多い樹木です。枝先に葉がまと

まって付きますが、枝先先端から枝が伸びるのではなく、葉の集まった枝先の下部から次の枝が伸びます。そのため、上へ上へと伸びるのではなく、横へ横へと枝を広げます。森林の林冠部に葉を展開するのではなく、林冠下の亜高木層で広く光を受け止めるのに適した葉の広げ方をしています。特徴的な樹形です。

リョウブは樹皮も特徴的で、薄く剥がれた跡が鹿の子模様となり目立ちます。樹形と樹皮の特徴から、落葉期にもその存在を知ることは、それほど難しくはありません。

リョウブの名は、むかし飢饉に備えて若葉を食するために令にて植えさせたところから令法(リョウブ)と名付けられたとか。山間部ではリョウブの葉を飯や穀物に混ぜて炊き、嵩増しに用いられました。旨くも不味くも無いと表されますが、終戦後の飢えを経験した年代からは、辛い経験とともに味が思い出されるようです。



時にはヒトが食したリョウブですが、野生動物も好んで食べます。特にリョウブの樹皮はニホンジカの好物で、ニホンジカ密度が高い地域では樹皮剥ぎが見られます。リョウブの樹皮が捲られて黄緑色の内皮が目立っています(上写真)。リョウブの樹皮は葉と同じくらい栄養価が高く、好んで樹皮剥ぎをします。びわこ文化公園のリョウブにもニホンジカの樹皮剥ぎの痕跡が見られます。探してみてもいいでしょうか？

(龍谷大学先端理工学部・横田岳人)